

平城京左京二条二坊十一坪の調査

—第581次

1 はじめに

本調査は、奈良市法華寺町における集合住宅の建設工事ともなう発掘調査である。東西3.0m、南北7.0m、面積21㎡の調査区を設定した(図237)。調査期間は、2017年1月16日から1月20日である。左京二条二坊十一坪の南部に位置する。同じ坪の北部における既往調査(平城第279・282-16・563次調査)では、坪の中軸に並び建つ東西棟建物と、その東西に建つ南北棟建物をはじめ、数時期の変遷をもつ比較的規模の大きな奈良時代の掘立柱建物群を検出しており、本調査区では坪の南部の状況の解明が課題であった。

2 基本層序

基本層序は、地表から、駐車場舗装(約10cm)、駐車場盛土(約90cm)、耕作土(約10cm)、床土(約60cm)、黄褐色粘質土(遺物包含層、数cm~30cm)、黒褐色土(整地土、調査区東辺でわずかに確認できる)、地山(上から、黄褐色粗砂、灰白色粘土、灰色粘土、緑灰色シルト、暗緑灰色粗砂、暗青灰色シルト)。包含層・整地土・地山のいずれも、本調査区北方の調査(第563次調査)で確認したものとよく似ている。

遺構検出は、調査区東辺にわずかに残る整地土および地山の上面でおこなった。遺物包含層である黄褐色粘質土が、後述する調査区西部で検出した南北溝状遺構SD11065の上面で落ち込むことから、遺構検出面の標高は調査区東部で約60.1m、西部で約59.9mと、西方ほど低い。

3 検出遺構

柱列3条、柱穴5基、小穴1基、くぼみ状遺構1基、南北溝状遺構1条を検出した。

南北柱列SA11055 南北1間の柱列、柱間約1.5m(5尺)。調査区外の東・西・南方へ展開する可能性がある。掘方は、一辺0.4m四方で、深さは不明。

南北柱列SA11056 南北1間の柱列、柱間約1.5m(5尺)。調査区外の四方へ展開する可能性がある。掘方は、一辺0.4m四方で、深さは不明。

南北柱列SA11057 南北1間の柱列。柱間約3.0m(10

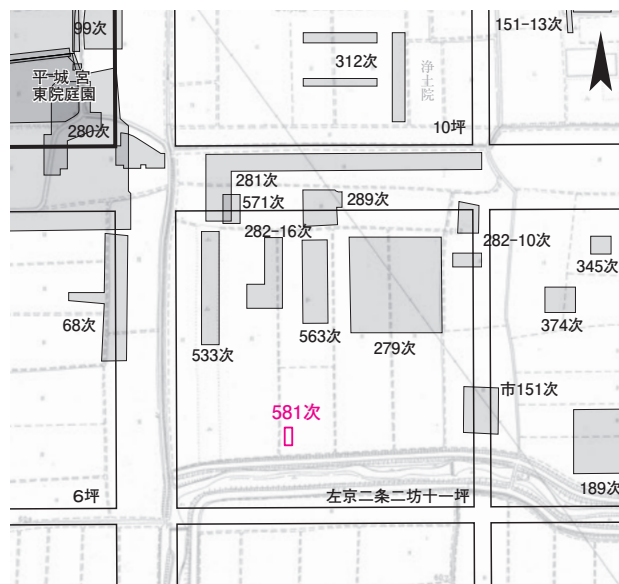


図237 第581次調査区位置図 1:3000

尺)。調査区外の四方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.8m以上で、深さは約1.1m。掘方に、幅約20cm、厚さ約2cmの薄い礎板を据えている。掘方および抜取穴の埋土から藤原宮式軒丸瓦や奈良時代の土師器および須恵器の甕や杯などが出土した。

柱穴SP11058 調査区南東部で検出した方形平面を持つ穴で、柱穴と考えられる。柱列として調査区外の東・西・南方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.8m以上で、深さは約0.6m。

柱穴SP11059 調査区南西部で検出した柱穴。調査区外の東・西・南方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.5m以上で、深さは約0.3m。

柱穴SP11060 調査区南西部で検出した柱穴。調査区外の東・西・南方に展開する可能性がある。掘方は、一辺1m以上で、深さは約0.6m。抜取穴から径10cm、長さ17cmの木材が倒れた状態で出土した。腐食がはげしいため確証を得難いが、柱根や床束など柱材であった可能性が考えられる。抜取穴から奈良時代の土師器甕が出土した。

柱穴SP11061 調査区南東部で検出した柱穴。調査区外の東・西・南方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.5m以上で、深さは約1.0m。

柱穴SP11062 調査区北辺部で検出した柱穴。調査区外の東・西・北方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.4m以上で、深さは約0.2m以上。

小穴SP11063 調査区北西部で検出した小穴。調査区外の東・西・北方に展開する可能性がある。掘方は一辺0.4m以上で、深さは不明。

くぼみ状遺構SX11064 調査区西辺中部で検出したくぼみ状遺構。調査区外の東・西・南方に続く。掘方は一辺1.1m以上で、深さは約0.2mと比較的浅い。



図238 第581次調査区全景（北西から）

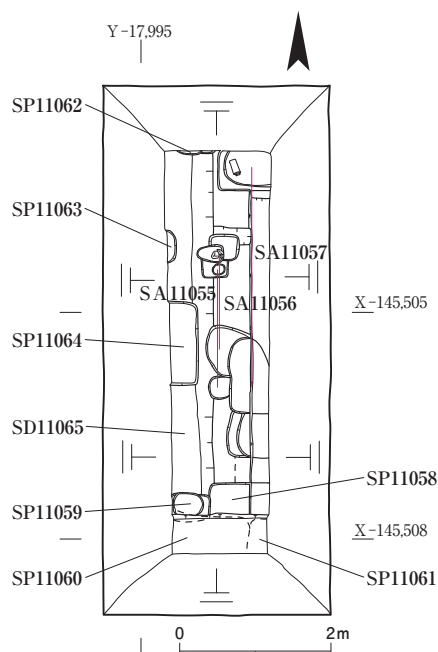
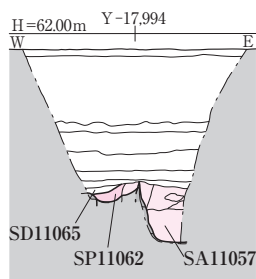
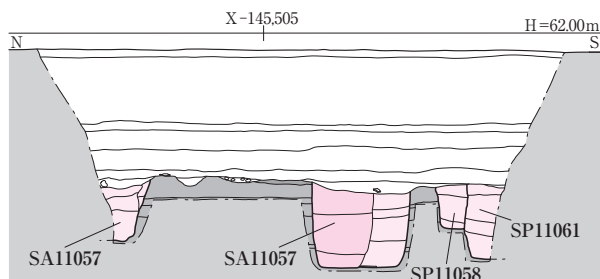


図239 第581次調査区遺構図 1:100



北壁



東壁

■ 整地土(黒褐色土) ■ 地山 □ 掘方 □ 抜取

0 2m

図240 第581次調査区北壁・東壁土層図 1:100

南北溝状遺構SD11065 調査区西半で検出した南北溝状遺構。調査区外の西・南・北方に展開する。幅は0.5～1.1m以上で、深さは0.1～0.4m。南ほど広く、深い。埋土は比較的均質な黒色粘土で、重複する遺構がこの溝の底面で検出されていることからみて、他の検出遺構よりも新しく、また検出した東肩がゆるやかなことから、周辺の遺構群が廃絶した後の沼状堆積である可能性が考えられる。奈良時代後半の猿投産須恵器杯B蓋などが出土した。

(鈴木智大)

4 出土遺物

遺構埋土および遺物包含層から土器類および瓦磚類および燃えさしなどが出土した。

土器類 奈良時代の須恵器、土師器が圧倒的に多く、とくに土師器甕の出土が目立つが、出土量は全体でコンテナ1箱程度と少ない。特筆すべき遺物としては、遺物包含層から圈足円面硯の脚台部が1点出土した。

(神野 恵)

瓦磚類 藤原宮式軒丸瓦が3点出土した。うち2点は

6272B、1点は型式不明である。6272Bの1点は南北柱列SX11057から、もう1点の6272Bと型式不明の1点は黄褐色粘質土から出土した。また時代不明の軒丸瓦1点が出土した。丸瓦は計2.5kg、平瓦は計4.7kg出土した。ほかに瓦や磚などは出土していない。

(今井晃樹)

5 遺構変遷

奈良時代後半と考えられるSD11065は遺構の重複関係から、他の検出遺構よりも新しい。また柱列はSA11055→SA11056→SA11057と、柱穴はSP11058→SP11059→SP11060→SP11061と変遷する。この他の検出遺構も多くが近接していることから、実際はより細かな変遷が想定されるが、調査区が狭小なため順序はあきらかでない。

6 おわりに

本調査では比較的狭い調査面積ながらも、数多くの遺構を検出した。左京二条二坊十一坪の南部においても、同坪の北部で検出していた遺構群と同等の遺構群が展開する可能性が高いことがあきらかになった。

(鈴木)